「令和８年産水稲の高温対策のポイント」

令和８年５月２８日
埼 玉 県 農 林 部

高温障害のリスク軽減には、適正な肥培管理がポイントです。
追肥の実施を想定し、あらかじめ追肥用の肥料を準備し対策に取り組みましょう。

１　長期気象予報

気象庁が５月 21 日に発表した１か月予報では、平均気温は高い確率 60％です。また、５月 19 日に発表された３か月予報でも６～８月の平均気温は高い確率 70％です。

これらの予報から、今年の夏季も平均気温は高いと見込まれ、水稲では白未熟粒等の高温障害の発生が懸念されます。高温対策を念頭においた栽培管理を行いましょう。

また、「コシヒカリ」や「彩のきずな」などの中早生品種は高温により出穂期が早まりやすいため、幼穂の分化状況等を参考に出穂期を推定し、追肥や斑点米カメムシ類の防除を適期に行うよう心がけましょう。

２　対策のポイント

⑴ 土づくり

水稲では肥料由来の窒素養分に加え、土壌から供給される窒素養分も非常に重要になります。そのため、土壌窒素の供給源となる有機物を積極的に投入し、土づくりを行いましょう。

ただし、堆肥等の有機物は高温条件下では急速に分解が進み、酸素が少ない湛水条件下では分解の過程で根に有害なガスを発生することがあります。田植まで、１か月以上間隔をあけて投入しましょう。

また、病害虫の被害や倒伏の軽減、根の活性維持のため、ケイ酸資材も積極的に施用をしましょう。

⑵ 作土深の確保

根張りを良くして肥料の円滑な吸収を促し草勢の維持が図られるよう、耕深は 15cm を目標にしましょう。なお、耕深が浅い場合、一度に深くすると機械の走行などに支障をきたすことがあるため、年々徐々に深くするようにしましょう。

⑶ 追肥の検討

一発肥料（緩効性肥料）は通常の肥料に比べ肥効期間が長く、肥料切れによる葉色低下を招きにくいとされていますが、昨年は、高温により肥料の溶出が早まり、生育後半の肥料切れがみられました。基肥＋追肥体系はもとより、一発肥料体系でもあらかじめ追肥用の肥料を準備しましょう。

⑷ 葉色診断に基づく中間追肥

穂肥の施用までに肥料切れが発生するとイネ体の消耗が激しくなり、穂肥を施用しても十分な効果が得られず、玄米の品質低下を招くことがあります。葉色の低下がみられる場合は中間施肥を検討します。詳しくは「彩のきずな」、「彩のかがやき」の栽培暦をご覧ください。

＜中間施肥の例＞

彩のきずな（早植栽培）：田植後 30～35 日頃の葉色「４～3.5」以下・窒素１～２kg/10a 程度
彩のかがやき（普通期栽培）：田植後 30 日頃の葉色「４」以下・窒素２kg/10a 程度